

大学院生用キャレルの思い出

法学部 教授

よしむらのりひさ
吉村典久

私が義塾の博士課程に進学した1985年に大学院棟が完成し、私には7階にキャレル(勉強机)が割り当てられた。きれいな建物と真新しいキャレルは人の心を沸き立たせる。私は、朝7時頃から夜9時過ぎまで、ずっとキャレルにしがみつき夢中になって専門書と格闘していた。時間を忘れて本を読んでいると、いつのまにか背後に怖い指導教授がのっそりと現れ、こちらをのぞき込んでいるなど大いに肝を冷やしたこともあった。とにかくあの時代ほど死ぬほど勉強をしたときはなかったと今でも誇りを言うことができる。

ところが、時間の多くを大学院棟のキャレルで過ごすようになると不思議なことに気づいた。それはなんと広い部屋に人があまりいないことだった。院生にはキャレルが与えられ、そこで勉強することができたが、実際にキャレルを有効利用していた院生は少なかったように思う。大体のキャレルは荷物置き場と化していたのである。このことに気づいたわれわれ悪い院生は、この空間を自分たちのために好き勝手に利用しようと考えた。まず、誰もいない両脇のキャレルや椅子を無断借用することから始まり、部屋の壁にあった本棚に私物の本を並べて完全占拠したほか、ポスターなども勝手に部屋の壁に貼るなど自由気ままな振る舞いをするようになった。もちろん、部屋を管理する院生自治会の組織があつて、いろいろ規制をかけてきたが、われわれにとってはどこ吹く風だった。権利の上に眠る者は保護されず！実際にキャレルを使っている者といない者との差は圧倒的であつたから、結局、われわれの行為は、黙認もしくは処置なしとして放置(?)されるような形になってしまっていた。

その後35年近く時は経ち、私の立場も完全に変わったが、今でもあの苦しくも楽しかった人生の一時期とその時期とともに過ごしたキャレルを本当に懐かしく思う。あの時代はわれわれにとって旧制高校生のStrum und Drang*の日々と同じようなものであつた。今の若い院生もキャレルを大いに活用し、得たい思い出を作っていってほしいと念願してやまない。



キャレルが並ぶ大学院棟の一室

*Strum und Drang (シュトゥルム・ウント・ドラング)：疾風怒濤

談	室
話	室

教員によるエッセイコーナー